

『和泉式部日記』における「女」の境遇についての試論 ——「御夜歩き」を端緒として——

武田 早苗

はじめに

—

和泉式部と呼ばれる女性は、高貴な宮様兄弟を手玉に取った「魔性の女」、あるいは恋多き多情な女性と、長い間受け止められてきた。もちろん、生存中の和泉式部が男性達の注目を大いに集めていたことを否定するものではない。しかしながら、『和泉式部日記』（以下『日記』と略称する）に描かれた時期、「女」すなわち和泉式部がどのような境遇にあったかについては、あまり積極的には論じられてはこなかった。そこで、本稿では拙著^①の訂正も含め、この点について検討を加えてみたい。

最初に『日記』での恋を誘引した為尊親王との交際について確認することから始めたい。為尊親王と和泉式部との恋を論じる際に必ず引用されるのが、『栄花物語』^②「鳥辺野」巻のつぎの記事である。

①彈正宮うちへ御夜歩きの恐ろしさを、世の人やすからず、あいなきことなりと、さかしらに聞えさせつる、今年はおほかたいと騒がしう、いづぞやの心地して、道大路のいみじきに、ものどもを見過ぐしつあさましかりつる御歩きのしるしにや、いみじうわづらはせたまひて、うせたまひぬ。このほどは新中納言、和泉式部などに思ひつきて、あさましきまでおはしましつる御心ばへ

を、憂きものに思しつれど、上はあはれに思し嘆きて、四十九日のほどに尼になりたまひぬ。

(新全集・三五六・三五七頁)

ここでは、世人の忠告を無視して大路に横たわる死者達を蔑ろにし、夜歩きをする為尊親王の異様さが描かれている。これを和泉式部への情熱と重ねて読むことも可能ではあるが、それは和泉式部のみに向いていた訳ではない。新中納言の閱歴が不明なので多くの場合無視された格好になつてはいるが、この記述によるかぎりでは、新中納言も通い所の一つであつたはずだ。

『栄花物語』の「見果てぬ夢」巻にはつぎのような記述もみえる。

②彈正宮いみじう色めかしうおはしまして、知る知らぬ分かぬ御心なり。世の中の騒がしきころ、夜中分かぬ御歩きもいと後ろめたげなり。

(新全集・一九三頁)

こちらでも夜歩きについて触れられている。「色めかしうおはしま」す為尊親王は、「知る知らぬ分かぬ御心」を持つており、「夜夜中」と出歩いていたという。だが、相手の具体的な名は挙げられてはいない。

双方の記事に共通しているのは、「歩き」の語が見え

る点である。いずれも彈正宮(為尊親王)による夜間の外出について述べられていて、それを非難している。①では和泉式部の名が新中納言とともにみえるが、それはあくまで「このほど」、つまり亡くなる前を意味しているのであり、その時期に二人の女性と関係があつたことを示しているにすぎない。とすれば、この二つの記事は、為尊親王の「歩き」を語ることに主眼があつたということになる。

しかしながら、この『栄花物語』側が提示する読みを、偏向して理解させる要素が、『日記』の側にあるようだ。『日記』では「女」と「宮」とが初めて逢瀬をもつた後、後朝の贈答は交わされるものの、夕暮れには文遣いの童が来たのみで、再度の来訪はない。そこで「女」が「待たましも」歌を贈る。それを受け取った「宮」について、次のように描かれる。

御覧じて、「げにいとほしうも」とおぼせど、かかる御歩き更にせさせ給はず。北の方も、例の人の仲のやうにこそおはしまさねど、夜ごとに出でんもあやしとおぼしめすべし。故宮の果てまでそしられさせ給ひしも、これによりてぞかしとおぼしつむも、ねんごろにはおぼされぬなめり

かし。⁽³⁾

(十六頁)

「女」からの歌を見て「いとほしうも」と思いながらも、結局「宮」が出掛けることはなかった。ここで注意したいのは、太線を付した「これによりてぞかし」である。この箇所についてはこれまで、「この女ゆえであった」⁽⁴⁾「あの女と親しくなさったからだ」⁽⁵⁾などと訳されてきた。しかも多くの場合、前掲の『栄花物語』①を補注などに掲出している。つまり、和泉式部すなわち「女」のもとに通ったことにより為尊親王は亡くなり、さらには世間の非難を受けていると解釈されているのだ。しかし、この段階で「女」のせいで為尊親王が亡くなったと喧伝されていたのならば、帥宮の方からわざわざ声を掛けるだろうか。また、それほど問題のある「女」について、この後乳母が「召してこそ使はせ給はめ」などと進言するだろうか。

そこで「これ」が何を指示しているかを周囲の記述に求めてみると、その直前の「夜ごとに出でん」に辿り着く。「宮」の心中思惟を「北の方も」からとして「例の人の仲のやうにこそおはしまさねど」を説明的挿入とみるか、「夜ごとに」からとするか、いまその判断はおくが、いずれにしろ、「故宮の果てまでせしられさせ給ひしも、

これによりてぞかし」の「これ」は、その直前にある二重傍線部「夜ごとに出でん」を指していると思われることができる。このように解釈すれば、先の『栄花物語』①②の記事内容とも照応する。つまり、為尊親王の夜間外出は衆目の知るところであり、それを非難する雰囲気も生前からあった。ところが、行状を改めずにそれを続け、病を得て亡くなったので、非難の声が公然とあがり、拡大したのだと。それゆえ、もともと「かかる御歩き」をしていなかった「宮」は、「夜ごとに出でん」ことをためらったのだ。このように考えると、この後に行われる乳母の進言についても容易に理解できそうだ。

そこで乳母の発言を詳細にみてみよう。

「(1)出でさせ給ふはいづちぞ。このこと人々申すなるは。(2)なにのやうごとなき際にもあらず。使はせ給はんとおぼしめさん限りは、召してこそ使はせ給はめ。(3)かるがろしき御歩きは、いと見苦しきことなり。(4)そがなかに、人々あまた来かよふ所なり。便なきことも出でまうできなん。(5)すべてよくもあらぬことは、右近尉なにがしがしはじむることなり。故宮をも、これこそ率て

歩き たてまつりしか。よる夜中と 歩かせ給ひ

ては、よきことやはある。かかる御供に「歩かむ人は、大殿にも申さん。(6)世の中は、今日明日とも知らず変はりぬべかめるを、殿のおぼしおきつることもあるを、世の中御覧じはつるまでは、かかる御歩き」なくてこそおはしまさめ」

(二十四頁)

まず(1)で、「どこに行くのか」と語り出し、「女」の許にであろうと察知している乳母は、(2)で「女」の身分に問題はないのだから召せばよいと進言する。その理由は、(3)にあるように「かろがろしき御歩き」が見苦しいからである。このことは(5)でさらに繰り返される。故宮を連れ歩いた右近尉を非難するだけでなく、その代行をする者がいれば大殿に言い付けると周囲を脅している。最後に(6)で、政治情勢が不安定だから外出を控えるよう「宮」に懇請する。乳母の言には「歩く」の語が五度使用されているように、諫言の大半は夜間の外出についてである。しかも「女」について触れた(4)では、その行状に言及してはいない。このことは何を意味するのだろうか。(4)で語られるのは、複数の人々が通っている所であることから、何か事件が起こったら困るという危惧である。通常は、実際に起こった花山院と藤原伊周とに関わ

る一件を彷彿とさせるものと理解されている。つまり、「女」がいるのは、複数の男性が通い所としている邸だと述べているのだ。言い換えれば、複数の女性達が同居している場所に「女」がいるということになる。『日記』中にも「人々方々にすむところなりければ」(二十九頁)という記述が見えており、これを裏付ける。「人々」、つまり複数の女性を、和泉式部の姉妹と見る立場もあるが、いかがであろうか。次節では別の観点からこのことを考えてみたい。

二

再度『日記』開始以前に時間を戻してみたい。『日記』で語られる敦道親王との交際前に周知のごとく、和泉式部には為尊親王との一件があった。その恋が敦道親王の時ほど情熱的ではなかったとしても、交際自体をまったく否定することはやはりできない。そしてすでに指摘⁽⁷⁾があるように、これらの恋のどこかの時点で、和泉式部は父親から勘当されたとみるべきであろう。勘当については、『和泉式部集』⁽⁸⁾のつぎの詞書などから証し立てられている。

正月七日、親のかうじなりしほどに、若菜やる
とて

こまごまにおふとは聞けど無きなをばいづらは今日
も人のつみける（正集二五一）

返し、親

無きなぞといふ人もなし君が身に生いのみつむと聞
くぞ苦しき（正集二五二）

心にもあらずあやしき事いできて、例すむ所も
さりとて嘆くを、親もいみじう嘆くと聞きていひ
やる、かみの文字は世のふることなり

いにしへや物思ふ人をもどきけん報いばかりの心地
こそすれ（正集四三三）

前者の詞書中に「親のかうじ」とあるからだ。後者にも
「心にもあらずあやしき事いできて、例すむ所もさりとて」
とみえる。この詞書は、四三三番歌から始まる十二首の
連作に付されたもので、その中にも「例すむ所」を去つ
たことが詠われてもいて、いずれも勘当と関連している
と理解できる。

では、勘当されたことを首肯するとして、その時期に
ついて和泉式部の人生に照らして考えてみると、やはり
為尊親王との一件の折というのがもつとも相応しい。と

いうのも、家集には次のような一首も見えるからであ
る。

親はらからなど、同じ所、にはかにほかほかに
なりて後、たふときことするにいひやる

その中にありしにもあらずなれる身を知らばや何の
罪の報いと（正集七一七）

ここからは、親と姉妹は同居していながら、和泉式部の
みが他所に住んでいる時期があつたことが分かる。姉妹
の中には出仕した人物や、夫の下向に同行した者もい
る。彼女たちが親元にいた頃とすれば、和泉式部も比較
的若い時期と想定できよう。とはいふものの、上限は、
橘道貞との婚姻よりも後であろう。何故ならこの結婚に
は、父の意向が大きく働いたと考えられるからである。
勘当をし、「無きなぞといふ人もなし」（正集二五二）と
まで詠った娘を、父親主動で能吏であつた道貞と結婚
させたというのにはやや違和感もある。和泉式部の方
も、勘当された親に「若菜」を贈る心遣いもみせてい
ることからして、結婚前のごく若い頃とするのには疑
間が残る。一方、下限は寛弘七年（一〇一〇）以前に求
められる。この年、父雅致が越前守として下向している
からだ。大江雅致の生年は不明だが、越前守に任命され

た頃、当時にあつてはすでに高齢に属していたと推定され、任期满了後に勘当したとも考え難い。とすれば、橘道貞との結婚後から、為尊親王、敦道親王との交際時期を経て、寛弘六年に彰子のもとへと出仕するまでの間ということになる。だが、『日記』内には屋移りをした記事はない。敦道親王との死別後には彰子の許へ出仕もしている。これらを勘案すれば、やはり勘当の原因は為尊親王との交際の折に求めるのがごくしぜんであろう。

このように考えると、前節で触れた『日記』中の「人々方々にすむところなりければ」が大きな意味を持つてくる。つまり、『日記』で描かれている時期、和泉式部は為尊親王との一件により勘当中であり、親元を離れ、寄寓の身であつたと考えられるからだ。

しかしながら、この勘当をほとんど考慮せずに、『日記』を読み解いている場合が散見される。もちろん他作説、つまり『和泉式部物語』とする立場からすれば、和泉式部の人生を直接的に反映させて読解することは言語道断ということにはなろう。しかし、和泉式部という女性の体験を下敷きにして書かれているとなれば、彼女の人生に目を向ける必要はあるだろう。一方、自作説を支持する立場をとり、一部では勘当について触れていて

も、それを「女」の状況と連動させて『日記』全体を読み解いたものを寡聞にして知らない。

為尊親王との関係は、病によって中断し、宮はそのまま薨去する。和泉式部は表立って喪に服する状況にはないが、『日記』冒頭にも見えるように、追憶の日々を過ごしていたに違いない。とすれば、長保五年の時点で父親が勘当を解いていたとも考えられない。このように考えると、『日記』中に見える「人々方々にすむところなりければ」は、親元ではなく、もちろん姉妹との同居でもないということになる。

三

『日記』に描かれている時期、和泉式部、すなわち「女」が勘当中の身であつたとすると、「宮」の行動を別の角度から解釈することが可能となる。

乳母の諫言により来訪を取り止め、その後ようやく訪れた月夜に「宮」は「女」を外に連れ出そうとする。次の場面に注目してみよう。

かろうじておはしまして、

「あさましく心よりほかにおぼつかなくなりぬる

を、おろかになおほしそ。御あやまちとなん思ふ。かく参り来ること便悪しと思ふ人々あまたあるやうに聞けば、いとほしくなん。おほかたもつつましきうちにいとどほど経ぬる」

とまめやかに御物語りし給ひて、

「いざ給へ。今宵ばかり人も見ぬ所あり。心のどこにものなども聞こえん」

とて車をさし寄せて、ただ乗せに寄せ給へば、我にもあらで乗りぬ。「人もこそ聞け」と思ふ思ふ行けば、いたう夜更けにければ知る人もなし。やをら人もなき廊にさし寄せて、降りさせ給ひぬ。月もいと明ければ、

「降りね」

と強いてのたまへば、あさましきやうにて降りぬ。

「さりや、人もなき所ぞかし。今よりはかやうにてを聞こえん。人などのある折にやと思へばつましう」

など物語りあはれにし給ひて、明けぬれば、車寄せて乗せ給ひて、

「御送りに参るべけれど、あかくなりぬべけれ

ば。ほかにありと人の見んもあいなくなん」

とて、とどまらせ給ひぬ。 (二十五・二十六頁)

「女」のもとへやって来た「宮」は、自身が通うことを迷惑だと思っている人々が多数いると聞いていると述べる。この「人々」の正体については、「女」のもとに通う他の男性達とするのが通説である。さらに、その直後にある「いとほしくなん」についても、「当惑しているのです」⁽⁹⁾「困ってしまったてね」⁽¹⁰⁾「私もつらくて」⁽¹¹⁾「それが悪いのでね」⁽¹²⁾などと、「宮」が自身のことを「いとほし」と評していると訳され、だから遠慮して訪れが間遠になったと語ったと理解されている。換言すれば、「女」のもとへ通う他の複数の男性たちは、「宮」が「女」のもとに通うことを知りながら（もちろんその正体までは知らずとも）、「宮」のことを邪魔だと感じ、「宮」もそれによって来訪を遠慮していたということになってしまふ。このような解釈には疑問を感じずにはいられない。

そこで、これらを解く鍵を当時の「女」、すなわち和泉式部の境遇に求めると分かりやすい。つまり、前節で述べたように、「女」は、複数の女性達が住む邸に仮寓しており、そのため、「宮」が通うことを、おそらくは「宮」

とは知らず男が通うことを、迷惑がる人々（通っている男性だけでなく、それを待っている女性達）が、存在するのである。だからこそ「宮」は「女」を「いとほし」と思うのだ。つまり、宮が足繁く通えば、仮寓の身である「女」は周囲から迷惑がられるに違いない。「女」の立場を思つて発せられた「いとほし」と解したい。そして、そのような「女」の立場を慮った「宮」が来訪を遠慮し、間遠になったのだと語ることが、筋も通る。もちろん、頻繁に訪れなかった宮が口実として使ったものであったとしても。

如上のように解釈できるならば、その前に発せられる「御あやまちとなん思ふ」も、「女」の仮寓を非難したものと解釈できるし、「宮」が様々な危険を冒してまでも「女」を連れ出そうとしたこともしぜんと理解できる。「女」を車に乗せる直前に「宮」は、「今宵ばかり人も見ぬ所あり。心のどこかにもものなども聞こえん」と述べ、到着直後にも、「さりや、人もなき所ぞかし。今よりはかやうにてを聞こえん。人などのある折にやと思へばつづましよう」と語る。恋人たちが「人」から見えないところ、「人」がいらないところを探すのは当たり前としても、「人」がいると遠慮である、言い換えれば、「女」のもとに他

の男がいたら遠慮だと解するのは、やはり合点がいかない。ここも、「女」と同居する他の女性のもとに男性が来ていると思うからこそ、気が気でないと述べていると解したい。

あわせて、次の場面についても考えてみたい。

九月廿日あまりばかりの有明の月に、御目覚まして「いみじう久しうもなりにけるかな。あはれ、この月は見るらんかし。人やあらん」とおぼせど、例の童ばかりを御供にておはしまして、門を叩かせ給ふに……。

（四十二頁）

これ以前、「宮」は門前にある車を目にし、「女」への不信任を募らせていた。そのため訪れが間遠になっていたのだ。しかしこの晩は、美しい有明月に誘われるように、訪れようとする。この折にも「宮」は「人やあらん」と思つていて、当該箇所も「それとも誰か男性が来ているのだろうか」⁽¹³⁾「誰か通つて来ているかもしれない」⁽¹⁴⁾などと訳されている。先にも述べたように、これ以前、「宮」が「女」に対して不信任を持ったことが語られているので、「人やあらん」を他の男性について述べたものとみることになんら疑義はもたれてこなかった。だが、ここは単なる推量にとどまらず、「見るらんかし」

と念を押している。つまり、月を見ていると確信にも似た思いを持っているのだ。しかも、ここでの月は単なる天体としてのそれではない。「宮」が「女」を外に連れ出した折に二人で眺めたものである。二人の思い出の「月」をきつと眺めているだろうと思うからこそ、訪れようとするのである。ところが、「人やあらん」を「女」の許に通う男と解するならば、「女」は他の男と一緒に月を眺めているかもしれないと推測したことになる。だからこそ、「思ほせど」と逆接で続くのだとも考えられよう。しかしながら、他の男と、月を眺めている「女」のもとに「宮」が行ったらどうなるか。それこそ乳母が危惧したような一件が出来してしまう。そのようなことが起こる可能性を想定しつつも、危険を冒してまで「宮」が来訪を決意するだろうか。やはり「宮」は、思い出の「月」を同じ思いで「女」も眺めているという確信めいたものがあつたからこそ出掛けたに違いない。とすれば、当該箇所「人」は、「女」と同じ邸にいる女性の許へ通う男と考えるべきであろう。

ここでまた、時間を『日記』前半部に戻してみたい。そもそも「女」の行状を疑っていながら交際が開始したのならば、最初に門が開けられなかった次の場面でも

「宮」はもう少し怒っても良いのではないだろうか。

宮、例の忍びておはしまいたり。女、「さしもやは」と思ふうちに、日頃の行ひにこうじて、うちまどろみたるほどに、門を叩くに、聞きつくる人もなし。聞こしめすことどもあれば、「人のあるにや」とおぼしめして、やをら帰らせ給ひて、つとめて、あけざりし櫛の戸口に立ちながらつらき心のためしとぞ見し

憂きはこれにやと思ふも、あはれになん」とあり。「よべおはしましけるなめりかし。心もなく寝にけるものかな」と思ふ。御返し、

いかでかは櫛の戸口をさしながらつらき心のありなしを見ん

推しはからせ給ふめるこそ、見せたらば」とあり。今宵もおはしまさまほしけれど、かかる御歩きを人々も制し聞こゆるうちに、内大臣殿、春宮などの聞こしめさんことも軽々しうおぼしつむほどに、いとはるかなり。

(二十・二十一頁)

いつものようにこつそりと訪れた「宮」は、「聞こしめすことども」があつたので、「人のあるにや」と思い、「やをら」帰宅している。来訪に気付かなかった様子の

「女」に対し、「宮」は怨言めいた和歌を贈るものの、一方では「今宵もおはしまさまほし」と思うのである。こゝも従来は、「女」の男性関係を加味して解釈されている。だが、本当にそうならば、「女」の返歌ぐらいで今宵も出掛けたいと思うだろうか。「聞こしめすことども」があればなおさら、もう少し疑いの目を向けても良いのではないだろうか。つまりここではすでに「女」が仮寓であるという状況を聞いており、他の女性の許に通う男が来ていたと推測したからこそ、「やをら」帰ったのだ。だからこそ、結局実現はしなかったものの、「宮」は今宵も来訪をと願うのである。

そして、以降間遠になるのは、「御歩きを人々も制」したからであり、「内大臣殿、春宮など」に対し慮ったからだけでなく、「女」の周囲への配慮という思いもあったからに他ならない。

『日記』の後半部には、様々な経緯で疑念を持った「宮」が「女」に他の男がいないことを確信することはあつても、その噂が世間的に払拭されたという記述はない。つまり、従来、「女」の多情さは『日記』開始前から世間的に周知のことであり、それは最後まで変わらないという前提に立って読み解かれてきた。換言すれば、多情で

あり自身の兄を死に追いやったと評判の高い「女」に帥宮は橘の花を贈ったということになる。そして、もしそうであるならば、「宮」は当初から分かつていたこの身持ちの悪い「女」の噂に苦悩する必要などなかったのではあるまいか。

おわりに

親から勘当されるに至った為尊親王との交際は、宮の病悩、そして薨去により幕切れを迎える。和泉式部にとつては思いもかけない終焉であり、心中を整理しきれずにいたはずの長保五年、敦道親王から花橘の枝が届けられる。それは、親元を離れて寄寓する邸にであった。その邸には複数の女性達がいて、複数の男性達を通い所としていた。このような状況の中で、和泉式部は敦道親王との交際を始めることとなった。『日記』では「女」の置かれた状況をかならずしも明らかにしていないし、声を掛けてくる男性が複数いたことは否定できない。噂や周囲の注進も含め、「宮」が多少なりとも「女」に疑念をもったことも確かにあった。しかし、身持ちの悪い女であることを承知の上で、この「女」にわざわざ声を

掛けたのならば、もう少し「宮」の対応も違っていたのではないか。『日記』冒頭から終始「宮」が心配しているのは、世間の目である。花橘の枝を贈り、「女」からの和歌に返歌した折、小舎人童に口止めをするのも、「すぎがましきやうなり」と思われることを憂慮しているからである。

一方で「宮」は、初めての逢瀬の折に、「かろがろしき御歩きすべき身にてもあらず」と述べて「女」の許にすべり込んでいる。これは口実だと従来は考えられてきた。もちろんそれは間違いではないであろう。しかしながら、この後にも「宮」が「夜ごとに出でんもあやしとおぼしめすべし」と北の方の意向を気にしたり、外出を「うひうひしうのみおぼされ」ていたりするのは、やはり夜出歩くことに対して抵抗感があったからに違いない。これは、「女」が、「あだあだしくもまだ聞こえたまはぬ」と、『日記』が始まってすぐの心中思惟で語った「宮」の人物像とも合致する。

和泉式部という女性に対して従来もたれてきた多情というレッテルは、『日記』の「女」にも投影して読み解かれてきた。しかし、和泉式部に付けられた多情の根拠を辿ると、藤原道長が「浮かれ女」（正集二二五番歌）

と揶揄した言に辿り着くに過ぎない。それとセットで引用される「かたらふ人おほかりなどいはれける女」（正集七九七番歌）が娘の小式部内侍を評したものである可能性¹⁵については、すでに論じたことがある。道長がいつの時点で「浮かれ女」と揶揄したかは断定できないが、おそらくは彰子の許へ出仕していた折と推測される。とすれば、道貞との結婚後二人の親王と浮名を流した女性に向けられたものと理解しても、そう不思議ではない。この時点でそれ以上の男性関係を想定するならば、この後、家臣であった藤原保昌との結婚に道長が関与したことも考え直さねばならないからである。

繰り返すようだが、和泉式部が多くの男性達から声を掛けられたことを否定するつもりはない。『日記』中でも七夕の折に、「好き事どもする人のもとより、七夕、彦星といふこともあまたあれど、目もたたず」（三十五頁）と「女」に声を掛ける複数の男性がいたことは記されている。後半部でも、「よからぬ人々文おこせ、また自らも立ちさまよふ」（六十頁）ということもあったという。『日記』では描かれないが、源雅通との交際も否定はできないし、敦道親王の喪に服している頃にも藤原道綱が声を掛けてもいる（正集二三四番〜二三九番）。

しかしながら、多数の誘いがあったことと、その誘いに何時でものつていたこととはまた別ではないだろうか。そして何より、和泉式部という女性が本当にふしだらであつたとしても、この『日記』を読むにあたつて、それを大前提とすることにやはり違和感を覚えるのだ。『日記』がどのように書かれているのか、そしてその中で整合性はあるのかないのか。この解明が依然なされてはいないからだ。そこで、一旦「女」が多情であるという大前提を外して、『日記』を読み解いてみたというのが本稿の趣旨でもある。もちろん、多情さは否定し、勘当のみを斟酌して解釈するということに対する批判もあるだろう。だが、それは甘んじて受けることとして、この『日記』に対する分かりにくさを解決する手段として、従来とは異なる立場から考察を加えてみた。これによりまた違った『日記』の世界がみえてくるのではないだろうか。そのような思いからの小さな試みである。大方のご批評を請いたい。

【注】

(1) 拙著『和泉式部―人と文学（日本の作家100人）』

(二〇〇六年 勉誠出版)。上記と本稿に齟齬がある場合は、本稿を優先する。特に為尊親王についての叙述は、和泉式部を多情な女性とする観点からのものと連動しており、訂正すべきだが、本稿の趣旨とはやや逸れるため、直接論じることは避けた。

(2) 山中裕氏・秋山虔氏・池田尚隆氏・福長進氏『新

編日本古典文学全集31 栄花物語』（一九九五年小学館）。以下『栄花物語』の本文はすべてこれによる。

(3) 『和泉式部日記』の本文は、宮内庁書陵部蔵（三

条西家旧蔵本）をもとに翻字し、私に漢字仮名を用いて作成した。ただし、便宜を図るために、近藤みゆき氏『和泉式部日記 現代語訳付き』（二〇〇三年 角川書店）の頁数を明記した。以下、同じ。

(4) 近藤みゆき氏『和泉式部日記 現代語訳付き』

(二〇〇三年 角川書店)

- (5) 岩佐美代子氏『和泉式部日記「三条西家本」注釈』
(二〇一三年 笠間書院)
- (6) 藤岡忠美氏「和泉式部伝の修正―為尊親王をめぐって―」(『文学』44-11 一九七六年十一月／後に『平安朝和歌 読解と試論』二〇〇三年 風間書房 所収)
- (7) 和泉式部が勘当されたことについては、古くは与謝野晶子『和泉式部全集(日本古典全集)』(一九二七年 日本古典全集刊行会)に見え、以後多数論じられているが、円地文子氏・鈴木一雄氏『全講和泉式部日記改訂版』(一九八三年 至文堂)で肯定的に受け止められた後、通説となっている。
- (8) 和泉式部の家集本文については、榊原本により、私に漢字仮名を用いて掲出した。なお、提示するに際し、通称である「正集」と表記した。
- (9) 円地文子氏・鈴木一雄氏『全講和泉式部日記改訂版』(一九八三年 至文堂)
- (10) 中嶋尚氏『和泉式部日記全注釈』(二〇〇二年 笠間書院)
- (11) 近藤みゆき氏『和泉式部日記 現代語訳付き』
- (12) (二〇〇三年 角川書店)
岩佐美代子氏『和泉式部日記「三条西家本」注釈』(二〇一三年 笠間書院)
- (13) 近藤みゆき氏『和泉式部日記 現代語訳付き』
(二〇〇三年 角川書店)
- (14) 岩佐美代子氏『和泉式部日記「三条西家本」注釈』
(二〇一三年 笠間書院)
- (15) 拙稿「和泉式部の恋・小式部内侍の恋――「かたらふ人おほかりなどいはれける女」とは誰か――」(『王朝の歌人たちを考える』久下裕利氏編 二〇一三年 武蔵野書院)
- (本学教授)